

# ユニバーサルデザインとしての ヴァナキュラーな歌と語りの人類学

ユニバーサルデザインとは、高齢者も子どもも障害者も、異なる社会や言語文化の成員も、できるだけ多くの人びとが使えるように想定してデザインするという考え方である。

民間に伝承されてきた歌謡や説話をはじめとするヴァナキュラー（《俗》）な歌や語りには、自分とは異なる世界や社会にある他者と繋がるためのユニバーサルデザインの可能性がある。今年度の連続講座では、多様な世界や社会におけるヴァナキュラーな歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての具体的な方策を提示すると同時に、人はなぜ歌い、語るのかという人類学的な問いを提起することを企図する。

統括コーディネーター：鵜野祐介

## 開催スケジュール

第1回（10月10日）「触文化とろう文化における歌と語り」

第2回（10月17日）「多感覚で楽しむストーリーテリング」

第3回（10月24日）「在日コリアンのアイデンティティ形成と伝承歌謡・説話」

第4回（10月31日）「スコットランドと山形における〈魂呼び〉の歌と語り」

会場：平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム

オンライン：ZOOMウェビナー

## 参加方法

対面参加の方は、当日会場までお越しください。オンライン参加の方は以下URL,QRコードより事前登録をお願いします。  
開催前日に参加URLをご登録いただいたメールアドレスにご案内します。

<https://forms.gle/HkZ9xDJKoJT4qKo77>



主催:立命館大学国際言語文化研究所

お問い合わせ先：立命館大学国際言語文化研究所事務局 [genbun@st.ritsumeai.ac.jp](mailto:genbun@st.ritsumeai.ac.jp)

イラスト：小林紗織



# ユニバーサルデザインとしての ヴァナキュラーな歌と語りの人類学

対面会場：

平井嘉一郎記念図書館  
カンファレンスルーム

オンライン：

ZOOMウェビナー

## 10月10日(金)

17:00~19:00

### 触文化とろう文化における歌と語り

- ▶ 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館教授)  
「触文化とユニバーサル・ミュージアム」
- ▶ 半澤啓子・穀田千賀子 (仙台市、手話民話の語り部)  
「手話で民話を語る」
- ▶ 藤岡扶美 (吹田市、手話うたパフォーマー)  
「ろう者も聴者も一緒に歌い演じる」
- ・コーディネーター・司会・コメンテーター：  
鵜野祐介 (立命館大学文学部教授)

\*\*\*\*\*

視覚障害者の触文化、聴覚障害者のろう文化、両者はそれぞれマイノリティ社会における独自の歌や語りの文化的伝統を持ちつつ、常に生成し続けている。両者はマジョリティ (健常者) 社会から差別され疎外されてきた歴史を持つが、その一方でマジョリティとの対話や交流の歴史も持っている。二つの社会の「架け橋」を志向する活動は、今日において全国各地でどのように行われているのだろうか。発表者たちの歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての展望を模索する。

## 10月24日(金)

17:00~19:00

### 在日コリアンのアイデンティティ形成と 伝承歌謡・説話

- ▶ 黒川麻実 (愛知県立大学准教授)  
「在日コリアンが語る韓国朝鮮の昔話—国語科教科書を中心に—」
- ▶ 安聖民 (立命館大学講師)  
「パンソリ演唱《興甫歌 (ホンブとノルブ)》」
- ・コーディネーター・司会・コメンテーター：  
庵道由香 (立命館大学文学部教授)

\*\*\*\*\*

ヴァナキュラーな歌謡や説話はコリアン・在日コリアン・日本人、三者のアイデンティティ形成の独自性・多様性と共通性・連繋性のためのツールとなってきた。戦後日本において韓国朝鮮の昔話が絵本として出版され、国語教科書にも掲載されてきたが、在日コリアンの作家たちが重要な役割を担ってきた。また、大阪を中心にパンソリライブを長年上演してきた在日コリアンがいる。こうした活動はユニバーサルデザインとしての歌や語りの試金石となることを確認するとともに、今後の可能性を展望する。

## 10月17日(金)

17:00~19:00

### 多感覚で楽しむストーリーテリング

- ▶ ニコラ・グロウプ (英国、イースト・ロンドン大学重度重複障害  
インクルーシブ・リサーチ教授)  
「マルチセンサー・ストーリーテリングの重要性について」
- ▶ 高野美由紀 (兵庫教育大学教授)  
「障害等のある子どもとのストーリーテリング」
- ▶ 光藤由美子 (松山おはなしの会会長)  
「英国などの民話を多感覚で楽しむ」
- ・コーディネーター・司会・コメンテーター：  
岡本広毅 (立命館大学文学部准教授)

\*\*\*\*\*

人間は誰もが歌や語りを聴くことが好きだし、また誰でも歌や語りを自分の中に持っている。知的障害や重度の障害を持った人たちももちろん同様である。彼ら／彼女たちが歌や語りを共有するための手法である「マルチセンサー・ストーリーテリング」を実践する英国の語り部と、彼女の理論と方法を学び、日本でその普及や新たな展開の活動に取り組んでいる2人の発表者たちが、この理論と実践について、語りの実演も交えながら紹介し、今後の可能性を展望する。

## 10月31日(金)

17:00~19:00

### スコットランドと山形における 〈魂呼び〉の歌と語り

- ▶ マーガレット・ベネット (英国、グラスゴー大学教授)  
「スコットランドの子守唄と吊い唄」
- ▶ 渡部豊子 (語り部、日本民話の会会員)  
「山形の子守唄と吊い唄・吊い語り」
- ・コーディネーター・司会・コメンテーター：  
山崎 遼 (立命館大学産業社会学部准教授)

\*\*\*\*\*

死の世界と生の世界とのあわいにある存在、それが生まれたばかりの赤ん坊であり、息を引き取ったばかりの死者である。前者に向けて歌われる「子守唄」、後者に向けて歌われる「吊い唄」や「吊い語り」、これらは共に、言葉の壁や生死の境を越えた〈魂呼び〉の歌と語りである。ユーラシア大陸の東西端に位置する2つの地、英国スコットランドと東北山形の〈魂呼び〉の歌と語りに、「人はなぜ歌い、語るのか」という人類史的視座から、ユニバーサルデザインとしてのヴァナキュラーな歌と語りの原像を探る。